

平成30年度 種子島開発総合センター「鉄砲館」特別展

(明治維新150周年 西之表市 市制施行60周年記念)

かごしま
明治維新博

150th Anniversary



西之表市は150周年

明治に躍動した 種子島の女性たち展

会期 9/10[月] - 11/30[金]

時間 8:30~17:00

会場 種子島開発総合センター「鉄砲館」

幕末から明治の激動の時代

種子島の先駆をなし、力強く生きた女性たちがいました。

今回、9名の女性にスポットをあて、彼女たちの生き方を紹介します。

今を生きる私たちに

誇りと勇気、自信を与えてくれるでしょう。

入場
無料

紹介する女性たち

松寿院

平山優子

山田歌子

増田周袈裟女

牛野豊女

武田つる

古市静

大木ウメ

馬場愛子

主催 西之表市教育委員会

種子島開発総合センター「鉄砲館」TEL0997-23-3215

「明治に躍動した種子島の女性たち展」開催にあたって

江戸時代以前の女性は、家庭での妻や母としての役割が求められ、学問は不要と考えられていた。

「江戸時代、女子の学問は字を写し、歌を詠じ、裁縫し、織紵し、三線を弾じ、踊を習ひ、箏を弄し、香を聞き、茶を瀹し、花を挿み、諸礼を学ぶ等の類なり。漢籍を読み、詩文を作るが如きは、極めて稀なる事にて、その父母たる者、多く之を戒めたり」と「女訓書」などに書かれている。

老中松平定信は、「女はすべて文盲なるをよしとす。女の才あるは大いに害をなす。決して学問などはいらぬものにて、かなよむ程ならば、それにて事たるべし。女はいかにも柔弱にして和順なることをよしとす」と提唱している。

しかし、明治時代になると、文明開化によって徐々に女子に対する教育が広まっていき、このような男尊女卑の風潮は衰微し、全国各地で女子教育の萌芽を迎えます。この種子島の先駆を為した女性は、種子島家第23代島主 久道名跡（松寿院 女の殿様）を挙げる必要があります。さらに松寿院の養育係を務めた、上妻婦恵、日本私立幼稚園の先駆けをなした古市静、お由良騒動に連座して種子島に配流され、歌を広めた山田清安の妻山田歌子、西村天囚博士を育てた平山優子・・・とつづく。

かつて、種子島は「歌よみの島」といわれた。冠婚葬祭には、老若男女、歌をつくり、朗詠する習慣が古くからあった。

これは、種子島家の歴代島主が古くから、堺との交易を通して、上方文化の摂取に積極的だったからに他ならない。種子島は、中央から隔絶した僻遠の地と思われがちだが、それは翻すと外来文化の玄関口であったということが出来る。

島人たちは、古くから新しい文化の息吹を敏感に受け止め、消化し、時代に遅れまいと切磋琢磨することに慣れていたのであろう。

種子島の女性たちの歴史の中に多くの逸材を輩出することができたのは、かかる先人たちの飽くなき文化の欲求の中で培われたことを忘れてはならない。

この展示会が、種子島に生きる人々に、誇りと自信を与え、心の糧とならんことを念じる次第である。

種子島の明治期の概要

1. 明治維新

版籍奉還

明治2年(1869年)、新政府から、版籍奉還の命令をうけた種子島では、これについて賛成と反対の二つに分かれて議論がもつれたが、結局、賛成の意見に落ち着き、版籍奉還に決定した。版籍奉還とは、各藩主が所有していた土地と人民を朝廷に返したことである。

新政治の出発

明治2年(1869年)、藩主 島津忠義が、鹿児島藩知事に任命され、種子島地頭に平山竜助、地頭副役に養田耕蔵が任命された。そして、島主 久尚は、島主という政治の座から退くことになった。

種子島私学校

第3代区長 小倉壮九郎は、明治8年(1875年)、慈遠寺跡地に種子島私学校を開設した。

はじめは、志願者は少なかったが、翌年には、1,000人を越える盛況になった。これは、西郷隆盛を信頼し、私学校の方針に共鳴する旧士族が増加したことや、第73郷校の監事 前田宗成(豊山)と教官 種子島時直の2人が16歳以上の郷校生の私学校への参加を決定したことによるといわれている。

西南の役 出陣

明治10年(1877年)、薩摩の軍艦「寧静」は西海岸が大しけの中を、東海岸の田ノ脇浦に午後7時ころ入港した。種子島私学校徒の第一陣386人は、旧慈遠寺跡の私学校校庭に集結し、総指揮官 田上権蔵の出発の号令で、一番隊より順次に、家族や親族などに見送られて、松明をたよりに、大雨の中を行軍し、田ノ脇に到着したのは、真夜中であった。

翌28日午前4時ごろ、田ノ脇出発。寧静艦は大しけのため、難航し、鹿児島入港は、夜中の12時ごろであったという。その後、寧静艦の種子島への航海は不可能となり、待機していた第二陣500人の従軍は叶わなかったのである。

種子島私学校徒第一陣386人のうち、配属の決定したものは、318人で、2月14日、勇んで練兵場から出陣し、黒木孫次の指揮した一隊53人は西郷のしんがりに加わって、3月3日に出発した。

種子島隊の奮闘

種子島私学校徒は、各地で奮戦したが、不運にも戦死、負傷、降参した人、また、運よく無事で帰島できた人もあり、悲喜こもごものうちに西南の役の幕が閉ざされた。

この戦争の最大の悲劇は、同じ鹿児島県人が官軍と西郷軍(賊軍)に分かれて戦い、友人、兄弟、親子が互いに殺しあったことである。

東町の玉川のほとりの小さな丘の上に、招魂碑や従軍者碑などが建っている。



2.外国船の海難事故

カシミア号の難破

今から133年前の明治18年(1885年)9月12日、米国の三本マストの帆船カシミア号は、種子島の東南海上で猛烈な暴風雨にあい、遂に沈没した。

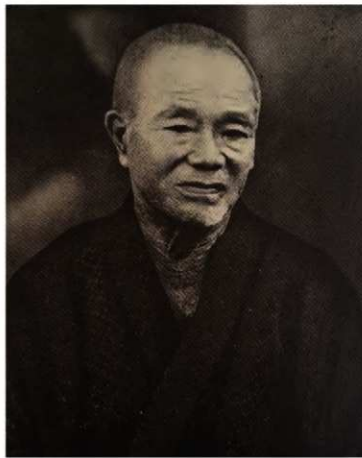
船員15人のうち、船長以下3人の上級船員は大波にさらわれ、残り12人の内7人は、15日朝、ボートで立山の舞床浦に、残りの5人は、20日夜半、筏で伊関の流合海岸いかにに漂着した。見たこともない大男の濡れぬずみ姿を見て、村人たちはびっくり仰天、上を下への大騒動となった。

立山小学校の河内先生、伊関小学校の下村先生の適切な指導のもとで、手厚い看護を受けた漂着者たちは、翌日には健康をとりもどし、役人に付き添われて馬で西之表へ送られた。さらに役人の周到な手配によって、鹿児島、神戸、横浜へと護送され、米国領事館の手によって、無事、米国へ帰国することができた。



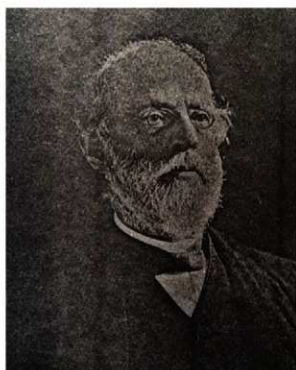
米国民の感謝

日本人のこの厚意を米国市民及び政府は、最高の感謝の心を表すために、立山の宿主 岩坪平左衛門と伊関の救助者 古田貞吉へ、それぞれ金メダル一個と金子25ドル、さらに両村の子弟教育の充実と向上のために、5,000ドルを贈った。



日本国民の感謝

日本政府は、日本人の博愛心を強調して、米国の政府を感動させた、米国の一市民ホーレス・エフ・カッターに藍綬褒章を贈った。両村民はこの国際的美談を永久に伝えるために、漂着地並びに小学校の校庭に記念碑を建て、漂着記念日には、毎年、日米親交の式典を行っている。



3.島外からの移住者

移住地

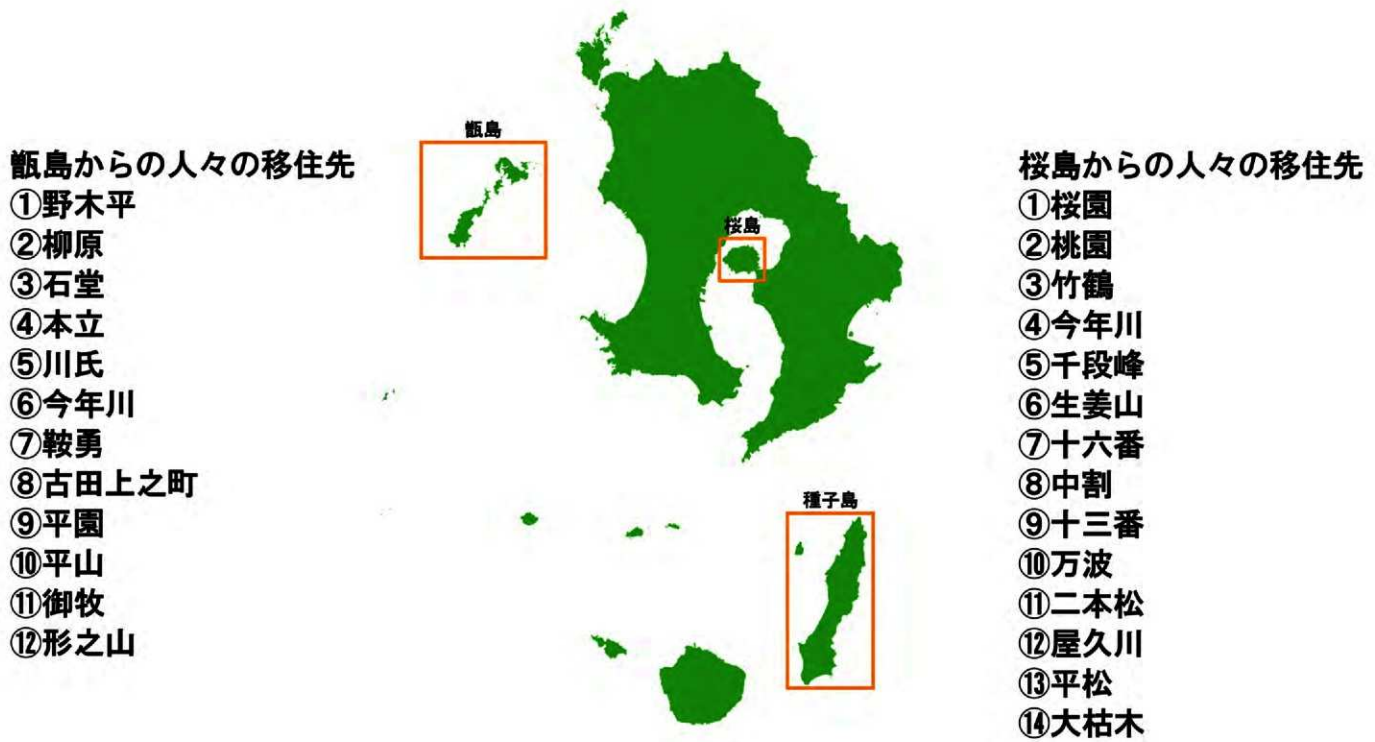
種子島は、気候、地味、地勢などが農業に適しており、人口の割に土地が広く、周囲を海に囲まれ、その上、人情が豊かで、生活しやすい島である。

そのため明治時代の初めから、大正3年までに島外からの移住者を千数百戸も迎え入れた。大量移住は、甑島から全島へ600戸、桜島から西之表へ341戸。その他、山川、坊津、奄美大島、香川県、静岡県からも移住が行われた。各移住地には、記念碑が建てられて、そのゆかりと歴史を物語っている。



移住者のあゆみ

最初に水の心配。開墾に取りくんだ。交通の便は悪く、電灯もなく、苦しい生活の連続であったが、島民の温かい心に支えられて、皆が心を合わせ、努力したかいがあって、現在のような繁栄をもたらした。



その他の地からの人々の移住先

- | | |
|-----------------------|--------------------|
| ①山川→岳之田(榕城) | ⑤徳之島→野木(立山)・植松(安城) |
| ②坊津→久保田(国上) | ⑥大島→万波(立山) |
| ③沖永良部→上ノ古田(国上)・白石(国上) | ⑦香川→芦野(立山) |
| ④与論→植松(安城)・高山(安城) | ⑧静岡→番屋峯(古田) |

4.明治時代の牧畜

ぎゅうぼくしゃ 牛牧舎

西之表の武田竜蔵、西村守人の2人は、過去5年間の実験を通して、馬毛島が牛の牧場経営に適することを確認、明治11年(1878年)、同志7人と牛牧舎を設立した。馬毛島全島を政府から借りて、43頭の実験ずみの種子島牛を基にして事業を始めた。

まず、デボン種などを入れて改良につとめたところ、6年後には100頭以上の改良牛を得ることができた。これらの改良牛は次第に真価が認められて、種子島の種牡牛として利用され、これによって種子島牛の質が向上した。

ぼくようしゃ 牧羊社

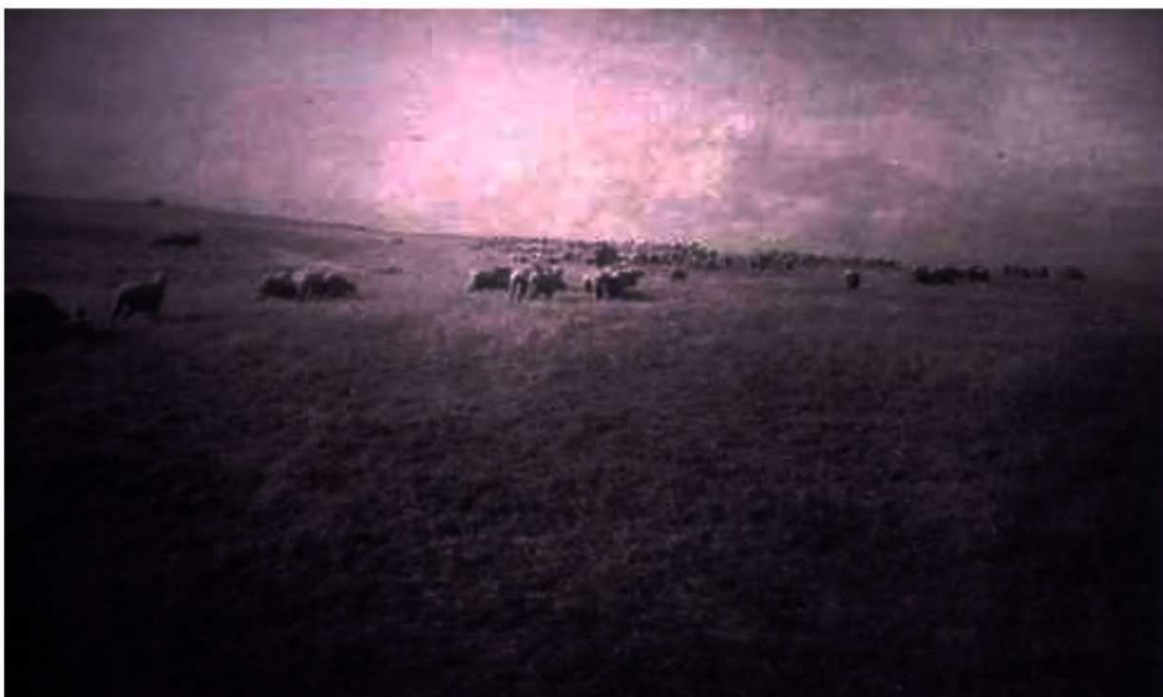
明治12年(1879年)、武田竜蔵などは牧羊社を設立し、綿羊の貸し下げを政府に願い出た。政府は、実地調査を行い、明治13年(1880年)、政府の綿羊試験場を牛牧舎に設け、飼育管理を牧羊社に命じた。

翌年、政府が派遣した2人の指導員とメリノ種の種牡羊14頭、雌羊486頭が馬毛島へ渡った。

2年にわたり、飼育法の指導を受け、県下では最大の綿羊牧場となった。その後、政府は経営のすべてを牧羊社に任せたが、寄生虫や暴風災害の被害をうけ、明治32年(1899年)、鮫島甚七個人の経営に移った。



(写真 ふるさとの思い出 写真集 明治大正昭和 西之表 平山武章 編)



(写真 個人蔵)

5.教育と文化活動

大園学校

安永7年(1778年)、西之表中目の大園(現:鉄砲館)にあった種子島記録所のこと、今から240年前に設置された。この設置は薩摩の記録所と同一時期であり、種子島がいかに教育に力を入れていたかが理解できる。

しかし、この学校は幼年教育を終わった武士の子弟だけが勉強したところで、一般には開放されなかった。

明治の教育

明治5年(1872年)、教育制度が定められて、各村に変則小学校が設けられ、だれでも差別されずに教育が受けられることになった。翌6年(1873年)、西之表に種子島の母校として、第73郷校が設けられ、野間(中種子町)と荃永(南種子町)に分校、翌7年以降、14の支校が設けられた。

明治9年(1876年)、正則小学校を開校。明治11年(1878年)、正則小学校を分離して、榕城小学校と呼び、第73郷校を廃止して、公立種子島準中学校を設置した。これより、島内各村に小学校が設置された。

前田 豊山まえだ ほうざん

今から約190年前の天保元年(1831年)、西之表中目の豊山の前田紫洲の長男として生まれ、前田讓蔵、宗成、号を豊山と呼んだ。

生まれつき温厚で、幼いときから父の紫洲について学び、7才のころには、はや四書の勉強をしていた。後には大園学校で本格的に儒学を学び、成人して鹿児島に留学し、父に劣らない偉い学者になった。

第73郷校の第二代校長になった豊山は、大義名分を道德の基とした。

明治11年(1878年)、第73郷校が廃止されると豊山は島の人材養成の将来を憂い、時代とともに変わっていく、島の中等教育の行く末についての指針を残している。

晩年、目が悪くなり、教職から退いたが、なお、その一生を学問と教育のために捧げ、その信条は、一貫して変わらなかった。

いついかなる時も正々堂々と正論を主張し、己を責むるにも、また、厳しい人で、種子島聖人と島民に尊敬されながら、大正2年(1913年)82歳の長寿で他界された。



にしむらてんしゅう
西村 天囚

今から約150年前の明治2年（1865年）、西之表中目の大園の西村城之助の長男として生まれ、本名は時彦、碩園とも呼んだ。

生まれつき豪放らい落で、2歳のとき父を失う。5歳から前田豊山より漢学を習い、のち種子島準中学校で学ぶ。15歳のとき母の励ましで上京し、17歳で東京大学古典講習科へ官費生として入学。事情があつて、卒業前に退学した。22歳のとき書いた小説「屑家の籠」は大変な人気を呼んだ。

明治18年（1885年）、大阪朝日新聞に迎えられ、7年後には、東京朝日新聞主筆に転出した。その間に発表した記事や論説には優れたものが多く、朝日新聞の名声を高め、日清親善使節としても活躍した。

その後、京都大学漢文学講師、文学博士、宮内省御用掛の重職につき、関東大震災の直後発布された、国民精神作興の詔書は、天囚の謹作である。

大正13年（1924年）59歳で永眠した。天囚の筆になる日本宋学史をはじめとして、学問的に貴重な数多くの著作は、学界に大きく寄与している。

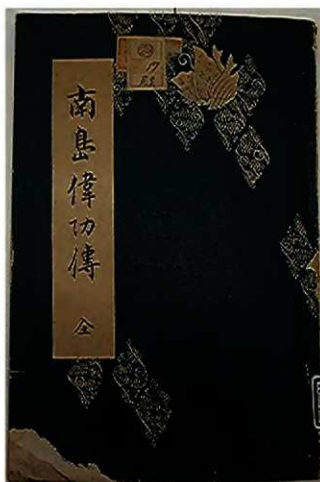
なお、朝日新聞のコラム「天声人語」の名付け親は天囚である。



なんとういこうでん
南島偉功傳の執筆

明治32年(1899年)、西村天囚が種子島家の数々の功績をつづった「南島偉功傳」が出版され、天囚の筆力は、ついに天覧を賜う光栄に浴した。

それにより、種子島家の功績が認められ、第27代 種子島守時は男爵の爵位を受けることになる。



しのめしや
東雲社

子島山水は、鹿児島で伊地知馬翁に俳句を学び、名をあげました。安政5年(1858年)、帰島して俳句の指導に力を入れ、同志と東雲社を結成して、種子島において俳句の全盛時代をつくった。

子島山水から教えを受けた羽生小磔は、明治26年(1893年)に、山水が亡くなると、東雲社の実質的指導者となり、盛會に尽くた。明治27年(1894年)、大阪好吟会の囑託により、支部長となり、翌年には、東京蕉風明倫教会に属し、俳人として活躍、明治34年(1911年)、蕉風会明倫協会より宗匠なった。

また、幼少から山水に俳諧を学び、小磔の指導も受けた、山水の孫、子島西坡は、昭和7年(1932年)、古池協会の宗匠になった。

これらは、東雲社に大きな喜びをもたらし、種子島の俳諧を一層盛大にした。

さいうんしゃ
彩雲社

嘉永3年(1850年)、種子島へ配流となった、山田歌子が、種子島の和歌に、桂園派の新風を吹き込んだことで、大きな変化をもたらし、種子島歌壇が活気づき、彩雲社結成された。

上妻謙三らの編さんした熊毛集、西村詠山が編集した西之表百人一首、平山優子の歌が皇后の御目にとまったことなど考え合わせると、当時の歌壇の隆盛ぶりがわかる。

花道及び茶道

羽生慎翁は、文政9年(1826年)、西之表松島で生まれ、故実や茶道、特に花道に優れ、明治2年(1869年)、京都へ遊学。池之坊第42世専正について花道を学び、帰島後、池之坊のいけ花を初めて種子島に伝えた。

明治15年(1882年)、池之坊花道大日本総会頭になり、また、羽生伊平は池之坊総監になり、種子島出身者で、池之坊界の最高地位を占め、池之坊を全国にひろめた。この功績を称え、東京芝・高輪の泉岳寺には、慎翁の紀徳碑が建立されている。

その他、絵画、書道、写真などにも一流の人材が出て活躍し、明治時代の種子島は学問、文学、美術などの文化活動の全盛時代であったといえる。



平成30年度 種子島開発総合センター「鉄砲館」特別展

(明治維新150周年 西之表市 市制施行60周年記念)

かごしま
明治維新博

150th Anniversary



明治に躍動した 種子島の女性たち展

解説シート

会期 9/10[月] - 11/30[金]

時間 8:30~17:00

会場 種子島開発総合センター「鉄砲館」

主催 西之表市教育委員会

種子島開発総合センター「鉄砲館」TEL.0997-23-3215

明治に躍動した種子島の女性たち展

紹介女性

松寿院

(1797～1865)

～島民第一 種子島の女殿様～

平山 優子

(1809～1894)

～西村天囚を育てた 優雅で謙虚な才女～

山田 歌子

(1810～1860)

～種子島歌壇に新風をもたらす～

増田周袈裟女

(1811～1889)

～才智に富み「歌」で町の苦境を救う～

牛野 豊女

(1843～1928)

～慈愛に満ち溢れた人生～

武田 つる

(1845～1886)

～内面に秘めた その優しさと強さ～

古市 静

(1847～1933)

～日本の幼児教育の草分け～

大木 ウメ

(1890～1965)

～けなげな孝行娘の孝行物語～

馬場 愛子

(1891～1968)

～種子島を愛し 島に尽くした人生～

解説パネルと実物資料を通して、9名の女性たちを紹介します。



松寿院自筆文書



平山優子 素描画



古市静 顕彰碑

明治に躍動した種子島の女性たち

江戸時代後期

- 1797 於隣(松寿院) 薩摩で誕生。生後3ヶ月で種子島家第23代島主 久道と婚約。
- 1809 平山 優子 西之表中目で誕生。
- 1810 山田 歌子 京都で誕生。
- 1811 増田周袈裟女 中種子増田で誕生。
松寿院 久道公と結婚する。
- 1827 増田周袈裟女、弟を連れ、赤尾木城に参上。村の苦しい実情を堂々と訴え、牧の分譲を願い出る。
- 1828 増田周袈裟女の訴えが認められ、牧を分けてもらう許可が降りる。
- 1829 久道公死去。於隣、「松樹院」と号す。
後継ぎがなかったため、松樹院が政治を取仕切る藩命が下り、女殿様が誕生。
後継ぎが決まるまでの13年間、島主として種子島を治める。
- 1831 薩摩藩主 島津 斉興より「松樹院」の「樹」の字を「寿」に変える様に命が下り、「松寿院」と号す。
- 1842 種子島家第24代 久珍が島主となる。
- 1843 牛野 豊女 南種子島間で誕生。
- 1845 武田 つる 西之表野首で誕生。
- 1847 古市 静 西之表中野で誕生。
山田 歌子、夫の清安の故郷 薩摩へ夫と共に帰郷する。
- 1849 お由良騒動の元凶として山田 歌子の夫が切腹となる。
- 1850 山田 歌子、夫の罪に連帯して処罰されることとなり、種子島へ配流となる。

山田 歌子・松寿院・平山 優子らが歌を通して交流
種子島の歌の文化の発展
- 1854 久珍公死去。後継ぎが幼かったため、再び松寿院が政治を行うこととなる。
- 1856 島津家内乱の戦により、都城(宮崎)で戦死した、種子島の兵士を弔うため、松寿院が、都城山田に、追遠塔を建立。
- 1857 松寿院は南種子町大浦川の川直しを行い、塩田作りに取りかかる。
- 1860 山田 歌子死去(享年50歳)
松寿院は、西之表港の波止の修築を薩摩藩へ願出、藩の援助を受け、着工。
また、種子島家の最も古い墓地である 御坊墓地を整備する。

- 1861 南種子の平山大浦塩田で製塩が成功し、塩田が完成。
- 1862 西之表港の波止 築島の増築と沖の岩岐が完成。
- 1863 松寿院が第19代島主 久基の甘藷栽培の偉業に感謝し、栖林神社を創建。
- 1864 牛野 豊女は、自分の貧困を顧みず、飢餓に苦しむ乳児を引取り、我が子同様養育し、その乳児と家族を救う。
- 1865 松寿院 死去(享年68歳)
- 1867 平山 優子は、孫の西村天因を養育し、文学的教養の基礎を身に着けさせる。
古市 静は、学問への熱意から、両親に黙って大阪へ出船するが、大暴風で失敗。
両親の怒りをかった静は、しばらくの間、家庭謹慎となる。

明治時代

-明治維新-

- 1868 古市 静、種子島家大典に仕える。しかし、目の病を患い、1年足らずで去る。
長崎で療養した後、鹿児島で家庭教師をする。
- 1869 古市 静は、森 有礼(初代文部大臣)が設立した鹿児島塾で英語を学ぶ。
- 1873 古市 静、東京へ戻った森 有礼を頼って上京し、森邸に住む。
当時、古市 静と森 有礼は、婚約関係にあったと言われているが、
森が、他の女性と結婚してしまい、静は大変ショックを受ける。
- 1876 牛野 豊女の善意に対し、初代鹿児島県知事 大山 綱良から賞詞を賜る。
- 1877 古市 静、東京女子師範学校(現・お茶の水女子大学)へ入学。
武田 つるの夫が西南の役へ従軍し、熊本で戦死。約35日かけ、夫の遺骨を探し
種子島へ連れ帰り、埋葬する。
- 1879 古市 静、肺病を患い、学校を退学。
父の危篤の知らせを受け、森 有礼に帰省費の支援を受けて、種子島に帰るが、
父は亡くなってしまふ。
- 1880 古市 静の師範学校時代の恩師 豊田 英雄が来鹿したことを耳にした静は、再度
鹿児島へ。鹿児島幼稚園の設立に携わった後、助手として勤める。
(現・鹿児島大学教育学部 附属幼稚園、国内で2番目に設立。)
- 1881 古市 静、再度上京。豊田 英雄宅の家を借りて生活する。
- 1882 古市 静は、自宅に私立時習女学校を開校し、中学程度の学問を教える。
- 1884 古市 静、桜井女学校付属幼稚園 園長 矢嶋 楯子の勧めにより、同校で勤務
することにし、時習女学校を閉鎖する。
- 1886 武田 つる死去(享年41歳)
古市 静、マリア・ツルーの後援で、東京に駒込幼稚園を設立(現・うさぎ幼稚園)

- 1887 平山 優子は、種子島歌壇に素晴らしい影響を与えたということで、知事より面会を求められるが、老齢を理由に和歌をもって断ると、その和歌のすばらしさが、典侍 税所 敦子に伝わり、さらに皇后までもがご覧になられる。
- 1889 増田周袈袈女 死去(享年78歳)
森有礼が刺殺され、古市 静は大変ショックを受ける。
- 1890 大木 ウメ 西之表西町で誕生。
古市 静が設立した駒込幼稚園が火災で焼失。移転し、沖静幼稚園と改名。また、画家 吉村 幸次郎と結婚する。
- 1891 馬場 愛子 滋賀県の医師一家の家庭に誕生。
- 1893 古市 静が養育していた、甥 実喜が発病し、療養のため種子島へ帰る。
- 1894 平山 優子 死去(享年85歳)
- 1900 古市 静は、沖静幼稚園の園舎で夜学校「有正学舎」を設立し、中学程度の学問を教える。
- 1903 大木 ウメの母が死去。父も寝たきりのため、一家の大黒柱として働き始める。
- 1908 大木 ウメの健気な姿が評判となり、県知事より表彰を受ける。
さらに、ウメの行いに感心した、儒学者 前田 豊山先生がウメの売る餅に「孝行餅」と命名。「孝行茶屋」と書かれた立派な立看板も寄贈される。
古市 静の営む幼稚園が、大森へ移転し、大森沖静幼稚園と改名。

大正時代

- 1916 古市 静は、7年ほど前から一緒に幼稚園を運営してきた島澤 雅に園の運営を託し、幼児教育の世界から引退する。
- 1923 馬場 愛子、東京女子医学専門学校(現・東京女子医科大学)を卒業する。
- 1924 馬場 愛子、中種子町増田出身の医師 馬場 農夫雄と結婚。
西之表東町に開業し、夫婦で診療を始める。
- 1925 馬場夫婦の営む診療所が、火事になるが、近所の方の助けで診療を続ける。
大木ウメ、大正天皇銀婚式の際、全国の孝女の一人として、表彰状と金一封の光栄を受け、同時に福岡日日新聞社より表彰状と銀盃が贈呈される。
- 1926 大木ウメの献身的な介護の甲斐なく、父が死去。

昭和時代

- 1928 牛野 豊女 死去(享年85歳)
古市 静、昭和天皇即位の大礼の際に、天杯拝受され、自伝「我が生涯」を著す。
- 1929 大木ウメ、39歳で鹿児島西田の堀氏と結婚。一男の子宝にも恵まれる。

- 1933 古市 静 死去(享年86歳)
- 1938 山田歌子の功績を称え、西之表榕城婦人会が顕彰碑を建立する。
- 1940 馬場 愛子の夫が病のため死去。
太平洋戦争が勃発。
馬場 愛子は、大戦中も、島民のために、モンペ姿で診療に奔走。
- 1943 馬場 愛子、西之表町国防婦人会長となる。
- 1945 太平洋戦争、終戦。
馬場 愛子は、戦後の厳しい生活の中、数十キロの距離を乗馬で往診にあたる。
- 1946 馬場 愛子、伊関小校医・熊毛郡婦人会長を務める。
このころから、町や郡の社会教育委員を歴任し、「明朗会」を発足、幼児教育の重要性を訴え、新しい幼稚園の設置を企画する。
- 1947 馬場 愛子は、戦後、女性の参政権が認められ、初めて行われた、西之表町議会選挙に出馬、見事当選を果たす。
榕城小校医・熊毛郡医師会理事・西之表町衛生委員を務める。
- 1948 馬場 愛子、日赤奉仕団熊毛郡委員長となる。
数年間、自ら街頭に立ち、募金活動の陣頭指揮をとる。
- 1949 馬場 愛子、救らい運動員、西之表町保健所運営委員を務める。
- 1950 馬場 愛子、労働省より婦人少年室協助員を拝命。
同時に、妊産婦及び乳幼児指導員も務める。
- 1952 馬場 愛子、熊毛郡未亡人対策委員となる。
- 1953 馬場 愛子、母子相談委員に任命される。
多岐にわたる社会福祉への貢献が認められ、県民表彰を受ける。
- 1957 馬場 愛子、公益に尽くしたことを評価され、藍綬褒章を授与される。
- 1958 明朗幼稚園開設。馬場 愛子、初代園長となる。(正式認可は1960年)
- 1965 大木 ウメ 死去(享年75歳)
- 1966 馬場 愛子、医療福祉部門で南日本文化賞を授与される。
- 1967 古市 静の顕彰碑が、西之表市わかさ公園に建立される。
- 1968 馬場 愛子 死去(享年77歳)

～島民第一 種子島の女殿様～

松寿院 しょうじゅいん (1797～1865)



松寿院は、薩摩藩第26代藩主 斉宣の次女として生まれ、生後3カ月で種子島家第23代島主 久道(当時4歳)に與人れし、文化8年(1811)、14歳で結婚。

しかし、文政12年(1829)久道が急逝。跡取りの子供は幼い時に亡くなり、世継ぎがいなかったため、薩摩藩より、松寿院が種子島の政治を行うよう藩命が下り、「種子島の女殿様」が誕生した。

松寿院は、久珍が第24代島主となるまでの13年間と、久珍亡き後、幼かった第25代 久尚に代わり、68歳の生涯を終えるまでの間、ひたすら島民のために貢献続けた。

松寿院の三大事業といわれる、大浦川の川直し、平山大浦塩田開闢、西之表港の波止(築島と沖の岩岐)修築など、代々の島主が成しえなかった大事業を次々と成功させた。このほか、製糖の許可を得て島の財政を豊かにし、御坊墓地の整理や、栖林神社の建立、飢饉・災害が起った際は、島民のために私財を投じて仁政を施した。

さらには、教育に尽くし郷学を創建するなど、松寿院の偉業は、数えきれないほどであり、それは松寿院の優しい人柄と家臣や島民から厚い信頼があったからこそ成し遂げられたといえる。

～西村天因を育てた 優雅で謙虚な才女～

平山 優子 ひらやま ゆうこ (1809～1894)



優子は、種子島家老の娘として生まれ、幼い頃から勉学に励み、周りの大人が舌を巻くような才女であったが、謙虚で優雅な人柄であった。

優子は、詩文にすぐれた平山西海と結婚、一男一女をもうけた。明治の文豪といわれる西村 天因は、優子の娘 浅子の子で、優子の孫にあたり、幼くして父を亡くした天因を、愛情深く養育し、文学的教養の基礎を身につかせた。

また、和歌にも長けていた優子は、種子島へ配流されてきた山田歌子と和歌を通じて友人となり、同年配の二人は、互いに切磋琢磨して歌作りに励み、種子島の歌風に大きな影響を与えた。

明治20年(1887)には、優子の名を聞いた鹿兒島県事より面会を求められたが、優子は老齢(78歳)を理由に和歌をもって断った。この次第を聞いた典侍 税所 敦子は感心し、再び優子に和歌を求めた。優子はこれに感涙し、歌を送ったのである。この歌に敦子はさらに感心し、皇后もご覧になったという。

これは優子ただ一人の榮譽にとどまらず、種子島の優れた文芸の一端を実証したものである。

～種子島歌壇に新風をもたらす～

山田 歌子 やまだ うたこ (1810～1860)

歌子は、京都に生まれ、和歌を縁に薩摩藩の京都留守居役である山田市郎左衛門清安と結ばれた。歌子をつれて薩摩へ帰郷した清安は、薩摩藩第28代藩主 斉興公の跡目相継争い（お由羅騒動）の中心人物として切腹を命じられ、歌子も夫の罪に連座し、嘉永3年(1849)、種子島へ配流となった。

種子島家第23代島主 久道夫人の松寿院は、種子島に流された歌子に、大変同情し、流人扱いせず、体の弱い歌子の世話を家臣にさせるなど、厚遇した。その家臣らは、歌子を実の母のように慕い、大切にしたり、歌子は穏やかに暮らすことができた。

また、優れた歌人であった歌子は、それまでの種子島の歌の特色である、伝統を固守した、抽象的で実感に乏しいものとは異なった、具体的で力強く実感を詠むという、新鮮で新しい歌風を種子島へもたらした。

歌を通じて友人となった平山 優子と、互いに切磋琢磨して歌づくりに励み、種子島歌壇を盛大にしていったのである。



田中城中に建立された顕彰碑

～才智に富み「歌」で町の苦境を救う～

増田周袈裟女 まずだしゅうけさじょ (1811～1889)

周袈裟女は、中種子町増田村中之町の百姓の娘で、南国的魅力の健康美と愛きょうがあり、それに歌がとてもう上手で、しかも才智にたけた、評判のよい女性であったといわれている。

周袈裟女の住む増田村中之町の田浦は、強い東南風の塩害で稲の収穫が少なかったが、周囲の村に比べて年貢が高く人々を苦しめていた。その苦境を目の当たりにした周袈裟女は、16歳の時に弟を連れ、赤尾木城に参上し、中之町の苦しい事情を堂々と伝え、牧の分譲をお願いした。それに感心した種子島家第23代島主 久道は、牧の分譲を許可したのである。

また、他に比べ年貢米が多いことも村の悩みになっていたことから、年貢米を決める役人の接待の席で、周袈裟女は得意の増田節を披露し、これが軽減されるよう、必死に歌ったのである。これを聞いた役人は、村思いの周袈裟女の行動に、とても感動し、年貢米を減じたという。このことから、増田節は評判となり、形を変えながらも、現在も歌い伝えられている。



増田周袈裟女の碑（中種子町）

～慈愛に満ち溢れた人生～

牛野 豊女 うしの とよじよ (1843～1928)

豊女は、南種子村高間の百姓の二女として生まれ、牛野の百姓、喜作と結婚した。牛野というところは、耕地が少なく、農家の多くは昔から塩たきをして、それを行商して生計を立てる、半農半漁の静かな村であった。優しい豊女は、夫を助けるため家業に精を出し、子宝にも恵まれ、貧しいながらも幸せに暮らしていた。

豊女3人目の子供が、生後1年あまり過ぎたころ、豊女はいつものように塩売りのため、米どころの基永村へ出掛けた。すると、両親が病床に臥し、母乳が出ないうえ、貧乏のため乳母を雇うことも出来ず、お腹をすかせて泣いている子に会った。事情を聞いた豊女は、迷うことなく、その子に母乳を与え、自分たちの生活も苦しい中、子を引取り、我が子と同様に4才まで養育したのであった。

この善意に対し、鹿児島県初代県令(知事)の大山綱良は、明治9年(1876)に賞詞を下賜され、豊女のとても人が良く、母性愛に溢れた人柄が、評価されたのであった。



牛野豊女 顕彰碑

～内面に秘めた その優しさと強さ～

武田 つる たけだ つる (1845～1886)

つるは、西之表野首に生まれ、近くの武田惟信と結婚、四男一女の子宝に恵まれ、家族と幸せに暮らしていた。しかし、西南の役が起こると、夫 惟信は種子島私学校党の人々と従軍し、熊本で戦死してしまう。

それを聞いたつるは、一時悲しみに暮れたが、せめてその遺骨をふるさとの墓に埋葬しようと決意し、周囲の反対を押し切って、生後6か月の乳児を背負い、種子島を出発、鹿児島で下船後は、熊本まで歩いて向かった。何日もかけ、ようやく到着した熊本の古戦場では、数百の遺骨が一つの穴にまとめて埋蔵され、骨ばかりのため、どの遺骨が夫のものかわからない。唯一の手がかりは、出征時に持たせた縞模様の防寒着のみで、それを頼りに掘り出していると、つるの思いが天に通じ、縞模様の布の絡みつく遺骨を発見した。つるが、種子島に遺骨を持ち帰ったのは、出発から約35日後のことで、祖先の墓地に夫の遺骨を埋葬、初志を果たしたのであった。

その後のつるは、夫の両親の孝養と5人の子供の養育に専念しながら、夫の供養に尽くした。また、かねてより歌心があり、歌会によく出席し詠草を楽しんだ。



武田 つるの墓(西之表市)

～日本の幼児教育の草分け～

古市 静 ふるいちしず (1847～1933)



西之表中野で生まれた静は、幼いころから向学心が強く、まだ女性教育が整っていない時代にも関わらず、学問への熱意は並ではなかった。多くの苦勞を乗り越え、鹿兒島へ渡り、森 有礼(後の初代文部大臣)のもとで英語を学ぶ。

その後上京し、30歳で東京女子師範学校(現・お茶の水女子大学)へ入学するが、肺病を患い、退学を余儀なくされ、悲嘆にくれる。そんな中、父が他界。種子島へ戻るも、静の向学心は燃え続けた。そして、再び鹿兒島へ渡ると、鹿兒島幼稚園(国内2番目の私立幼稚園)の新設に携わり、助手として1年ほど勤務した後、また上京。自宅で「時習女学校」を開設する。

その後、桜井女学校付属幼稚園(日本初の私立幼稚園)に勤務するが、目の病を患い、またも志半ばに終わり、苦悩の日々を送る。その中で、信仰の必要性を感じ、洗礼を受けキリスト教徒となる。

明治19年(1886)、東京に駒込幼稚園(現・うさぎ幼稚園)を設立、初代園長を務めた。まだ幼稚園が10園程度しかなかった東京では、先駆的な存在であった。また、園会で夜学校「有正学舎」を設立するなど、日本の教育の発展のために生涯を捧げたのである。

～健気な孝行娘の孝行物語～

大木 ウメ おおきうめ (1890～1965)

ウメは、西之表西町に生まれたが、13歳の時に母が亡くなり、父は病気で寝たきりであったため、はじめは親類や近所の世話を受け生活していたが、いつまでも頼るわけにはいかず、ウメは父の看護と弟たちの世話で忙しくしながらも、一家の大黒柱として、健気に働いた。

そのような環境の中でもウメは、苦勞を見せず、笑顔で日々を過ごしていたので、家は貧しいながらも、明るく楽しい家庭となり、近所の評判となった。

このウメの行いは、それを偶然耳にした鹿兒島県知事をとても感激させ、天皇誕生日の佳節には、知事より表彰状が贈られた。また、儒学者 前田 豊山先生は、ウメの売る餅に「孝行餅」と名付け、立派な立看板も寄贈した。これがまた、評判となり、店は大繁盛となった。

35歳の時には、大正天皇銀婚式の際に、全国の孝女の一人として、表彰を受けた。

その翌年、健気な介護の甲斐なく、父が亡くなる。ウメの悲しみはとても深かったが、亡父の冥福を祈りつつ、家事殿縫や生花をたしなみながら、静かに暮らした。その後、ウメにもようやく縁があり、39歳で結婚、子宝にも恵まれ、幸せに生きたのであった。



「孝行茶屋」の看板



～種子島をこよなく愛し、 島の発展を支えた医師～

馬場 愛子 ばば あいこ (1891～1968)

愛子は、滋賀県の医師一家の家庭に生まれ、32歳の時、東京女子医学専門学校を卒業。翌年、中種子町増田出身の医師 馬場 農夫雄と結婚。西之表東町で開業し、夫婦で診療を始める。やがて、夫が病に倒れると、診療の傍ら、一人で夫の看護に尽くすが、愛子が49歳の時、遂に夫が他界してしまう。

愛子は、子宝に恵まれなかったが、夫亡き後も種子島に残り、立ち遅れている島の発展のために尽くそうと決心する。本業の医師としては、大戦中はモンペ姿で診療に奔走し、終戦後は払下げの軍馬で、荒れ果てた道路を遠くまで診療にあたった。その一方で、多忙の愛子であったが、周囲の声により、西之表町国防婦人会長を引受け、日赤奉仕団熊本郡委員長や婦人少年室協働員なども務め、福利厚生にも貢献。また、初の女性議員として町議会議員も務め、それと同時に、幼児教育の大切さを訴え、幼稚園設置を企画し、明朗幼稚園（現・めいろうこども園）を設立、初代園長となった。

このように、愛子は夫の故郷の種子島をこよなく愛し、様々な分野で島の発展に大きく貢献したのである。



明治38年(1905年)頃の西町(街並み)

(ふるさとのおいほ 写真集 明治大正昭和 種子島市史編)

明治期の女性たちが改革した 種子島の歌の文化

文雅風流の家柄

種子島の歌の道は、種子島家の祖先である、平家一門の文雅風流(詩や歌を詠む風流)の道を継承しているところから始まるといえる。

種子島家初代島主 信基公の父 平行盛(平清盛の孫)は、新勅撰和歌集に載せられるほど、歌人としても名を上げていた。

ながれての名だにもとまれゆく水のあはれはかなき身はきえぬとも

[訳] 死後、歌人としての名だけでも残ってほしい。

流れゆく水の泡のように、あわれに果敢ない我が身は消えてしまっても。

自分を越えての和歌の浸透

江戸時代初期には、種子島家の年中行事として、歌会が開催されるようになり、これが恒例化。その後、他に先がけて、学問を奨励したことにより、若者たちは、武芸はもとより、学芸が向上し、和歌や漢詩が盛んになった。

また、種子島において、初めて歌道師範家として、和歌の門戸を構えた美座時親の教えにより、下層階級まで和歌が浸透し、多くの文人を生み出した。

二人の女性の功績

種子島において和歌は大衆化した。その歌風は、形式にとらわれた、抽象的で実感に乏しい古典的なものであった。しかし、お由良騒動で種子島へ配流となった、山田歌子により、具体的に力強く、迫力があって新鮮な歌風が伝えられると、和歌を通じて親交のあった平山優子が、伝統に固執することなく、歌子の新しい作風を取り入れ、お互いに切磋琢磨しながら歌づくりに励んだことで、種子島の歌の道に大きな影響を与えたのであった。

盛況から転換へ

幕末から明治にかけ、たくさんの歌人を輩出し、多くの秀歌が生まれた。そこで、歌集が編集され、種子島歌壇はますます盛況を呈し、文芸の島として、全国にその名を馳せたのであった。

そして、国内で歌革新の動きが盛んになるなか、種子島はそれに影響されず、大正・昭和へと進んだが、昭和初期頃から、自己の感慨を素直に表現した現代短歌へと転換していった。

和田の原八十島こゆるとしなみの

かひある御代にあひにけるかな

平山 優子

[訳] 大海原の多くの島々に、寄せては越える大波のように、こんなに高齢になるまで生きて、生き甲斐を感じるこの御時代に生きあえるとは幸せに思うことですよ。

吹く風も磯うつ波も心せよ

まだ里なれぬ祿の枕木

山田 歌子

[訳] 強く吹く風も、磯に打ち寄せる荒波も用心してくだされよ。
(荒波の中祿してきて)まだ住み慣れない里の祿の寝枕であるから。

うばたまの今宵も月はすみぬれど

はるる時なきわがころかな

武田 つる

[訳] 今夜も、月は夜空にくっきりと澄んでいるけれど、暗れる時はない、私の心であるかな。

いつしかに八十路の坂こえにけり

神の恵みの杖にひかれて

古市 静

[訳] いつの間にか、80歳を超えていました。神の恵みに助けられつつ。

四十年矢はずのごとくすぎんとす

むすびかねたる夢をのこして

馬場 愛子

[訳] (種子島に来て)四十年が、あっという間に過ぎていってしまったよ。
この島をもっと良くしていくという、私の夢がまだ叶っていないのに。